

「学び合う姿勢」の大切さ

宇都宮大学教育学部国語教育4年 加藤 千明

今年6月からの短い間でしたが、小山市の外国人児童生徒適応指導教室「かけはし」でのボランティアに行かせていただきました。

初め、行かせていただけることが決まった時は、ほかの言語も話せないし、そもそも外国人児童生徒への支援も初めてで、私にできることはあるのか、不安でいっぱいでした。しかし、実際に行ってみると、先生方もよくくださり、子どもたちも人懐っこくにこにこ笑いながら「こんにちは」と言ってくれました。

言葉が通じない中、どのようにコミュニケーションをとればいいのか悩みましたが、一緒に遊ぶこ

とが一番のコミュニケーション手段となりました。

ある日、魚や鳥などの絵を描いていた時、絵を指さして「さかな」「とり」と言うと、その子も真似し、さらにはその子の母語で「さかな」「とり」をどう言うか教えてくれ、一緒に二つの言葉を練習したことがありました。そのとき、こうやって分かり合うことができる、「言葉の壁」なんてないのだということを実感しました。教えるのではなく、お互いに学び合うこと、その姿勢の大切さに気づくことができました。

外国人児童生徒の未来を考え

宇都宮大学国際学研究科国際交流専攻1年 鄭 文

私は、昨年4月から外国人児童生徒の研究を始め、その研究のためということもあって、学生ボランティア派遣に参加することにしました。子どもたちと学校で実際に接触し、外国人児童生徒に関する問題の深刻さを強く感じました。

私が支援したのは、二人の中国系姉弟です。母は中国人で、父が日本人です。母親が朝から夜まで仕事をしているので、子どもの面倒は、父親にほとんど任せています。

昨年は10月、小学校1年生の弟のほうの支援に入りました。4月に日本に来たばかりで、授業内容の理解が難しく、日本語能力不足のためか、友だちを作れず、一人であることが多いとのことでした。3か月ほど経ったある日、「〇さんが、テイ先生を待っていますよ。週一回の支援を楽しみにしているようですね。」と担任の先生が話されました。学期末、

彼はだんだん明るくなり、友だちも作れて、私は少し安心しました。

今年は5月から、中学校1年の姉のほうの支援です。言語面では特に問題がないように見えたのですが、日本語文法を使いこなせないことが、学習への障害になったようです。3か月ほどのあいだでしたが、彼女といろいろ話しました。残念なことに、8月、彼女は中国へ帰りました。日本の学習環境が合わないのかなと思いました。

この活動を通して、子どもたちと交流し、自分もずいぶん成長したように思います。同時に、外国人児童生徒への支援は、子どもたちの学習支援だけではなく、子ども、保護者、先生の三者関係をうまく築いていくことが大切なことだと思いました。